

# 01 スプリット(クロアチア)

古代ローマの遺跡に住んでいる



## ●クロアチアの印象

クロアチア、といってもまだポピュラーではない。旧ユーゴスラビアで数年前まで戦争状態にあった国で危ないんじゃないか、といった先入観も多いだろう。しかし、夏のスプリットの空港に降り立ったとたん、そうした思いこみは完全に誤りであることを悟る。いや、それ以前にローマからの機内の雰囲気からしてみんながうきうきしている。そして、大きくはないがとてもきれいな空港を出ると、大型の観光バスが何台もツアー客を待ち受けている。クロアチアはEU諸国にとっての偉大なリゾート地なのである。この「偉大な」という形容には意味がある。

クロアチアは地中海の一部であるアドリア海に接する長い海岸線をもつ。この沿岸地方をダルマチアといい、スプリットは人口20万人のダルマチアでは第1の都市である<sup>※1</sup>。ヨーロッパ各地からのリゾート客は、地中海の明るい光と、青く澄んだ海を求めてダルマチアにやってくる。そこはイタリアやドイツの人にとって、近くて、しかし通俗的になりきっていない、自然を満喫できる土地である。しかしここがリゾートとして「偉大」なのはそればかりではない。ここはなによりも、ヨーロッパ世界におけるリゾートとしての「偉大な」歴史に裏付けられた土地なのだ。

## ●皇帝の隠居所から1700年

ヨーロッパという異なる民族、言語が集まる地域

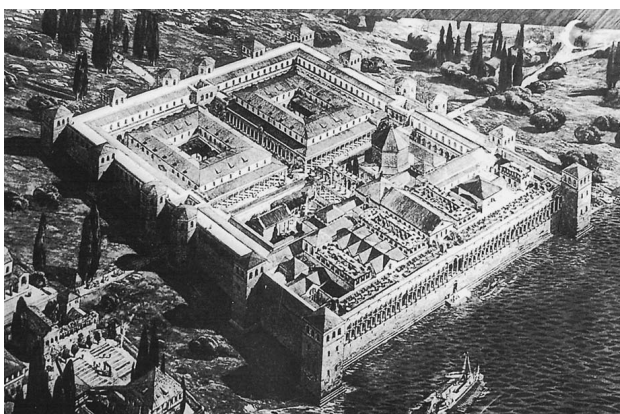


図1 ディオクレチアヌスの宮殿復元図(文献①)

を、ひとつのまとまりとして認識する根拠に、古代ローマ帝国の支配下を指すという考え方がある<sup>※2</sup>。とりわけ、都市の形成や建築の様式では、ヨーロッパでの共通性は古代ローマのデザインが見られるかどうかによるとさえいえる。すなわち、ローマの植民都市としての起源をもち、古典主義のオーダーと比例体系によって建築をまとめる方法が見られるかが、ヨーロッパ的なものを示している。

ダルマチアは古代ローマ時代その支配下にあったが、その後期、この地方から皇帝になった者がいた。ディオクレチアヌスである。彼は退位後、いわば隠居所として出身地に近いスプラトゥムに宮殿を造営した。これがスプリットのはじまりである<sup>※3</sup>。

ディオクレチアヌスの宮殿は東西約215m、南北約180mの長大な壁に囲まれている。この南側は今は海岸沿いのプロムナードになっているが、かつては海中から屹立しており、重要な諸室はこの海側に面していた。壁の内部で旧状をよく残すのは、宮殿の中央にあたるペリステリウムという中庭部分と、そのすぐ東にある八角形の霊廟である<sup>※4</sup>。ここはヨーロッパ各地に残る古代ローマの遺跡のなかでも、最も空間的にまとまっており、保存状態のよいもののひとつである。305年、このようにディオクレチアヌスの宮殿は「偉大な」リゾート地としてつくられたのであった。まもなく1700周年である。

## ●ヴェネチアとウィーンの出会う広場

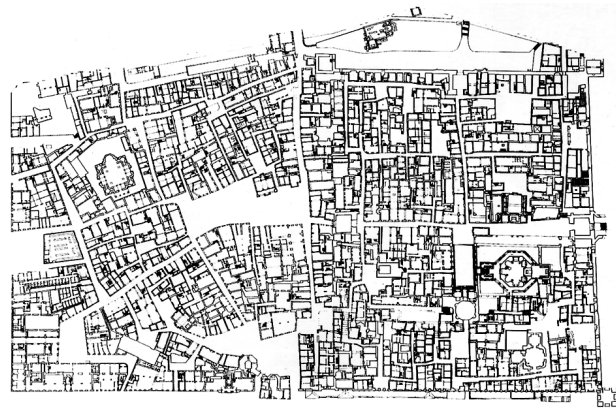


図2 旧市街の平面図(文献①) 右半分が宮殿跡 中央やや左の空地がナロドニ・タグ

- \*1 したがってスプリットは「小さな街」ではないが、この街のすばらしさを知っていただこうと敢えて1回目にとりあげた。
- \*2 ローマ帝国はドイツ東部や北欧には植民しなかったし、北アフリカや中東の一部も支配していたから、その地域が今のヨーロッパと完全に異なるわけではない。
- \*3 正確にはギリシア植民都市としての前史がある。
- \*4 7世紀以降教会となっており、中世には鐘楼もつくられた。八角形平面の屋根と鐘楼はこの街に象徴的なスカイラインを与えている。
- \*5 思想家ベンヤミンは、真正性（オーセンティシティ）を次のようにしている。「ある事物の真正さとは、この事物において、根源から伝承されるものすべてを総括する概念であり、これにはこの事物が物質的に存続していることから、その歴史的証言力までが含まれる。」（文献⑦）

スプリットが真にユニークな都市となるのはローマ帝国が滅んで後のことである。7世紀、堅固な壁に囲まれた安全性を求めて、人々が宮殿跡に住み着いた。そして、ペリステリウムと霊廟周辺を広場として残し、そのほかの場所には宮殿を構成していた石を積み替え、また新しい石材を加えて住居をつくっていった。こうして中世期にきわめて高密度な都市が、古代ローマの遺跡のなかに、それを文字通り基礎としてつくられていったのである。

10~11世紀になると、都市は壁のなかに納まらなくなり、西側にあふれ出した。そして、宮殿西門の前を空地として、そこを取り囲むように市街が拡張していった。ルネサンス期までには現在の旧市街の範囲が完成し、面積は当初の宮殿部分から西側に約2倍になった。したがって、宮殿西門前の空地はこの市街のほぼ中心に位置することになった。ここがナロドニ・タグ（市民広場）である。ここは現在でもスプリットの中心で、周囲の狭い路地がこの広場に流れ込み、商店やカフェが並ぶ、もっとも賑やかな場所である。

ナロドニ・タグを取り囲む建築を見ると、この街の置かれてきたヨーロッパのなかでの位置と、歴史を了解することができる。広場東側は、前述の通りローマ皇帝の宮殿の西門が、もはやそれと意識しなければわからないほどにその後の建物に埋め尽くされながらも開いており、その向こうには宮殿を改造した中世期の街のなかから時計台と教会の鐘楼が突



図3 ナロドニ・タグ 正面にウィーン・ゼセッション様式、右にヴェネチアン様式

#### ●参考文献

- ①J.MARASOVIC, REHABILITATION OF THE HISTORIC CORE OF SPLIT 2, AGENCY FOR THE HISTORIC CORE-SPLIT, 1998
- ②T.MARASOVIC, DIOCLETIAN'S PALACE-WORLD CULTURAL HERITAGE, DOMINOVIC AND BUVINA-ZAGREB, 1994
- ③A.TRAVIRKA, SPLIT-HISTORY・CULTURE・ART HERITAGE, FORUM-ZADAR, 2000
- ④日本建築学会『西洋建築史図集』彰国社
- ⑤太田静六「世界の古城(5)ローマ皇帝ディオクレチアヌスの城郭宮殿」『建築界』,19766
- ⑥陣内秀信『都市の地中海』NTT出版,1995
- ⑦ワルター・ベンヤミン、久保哲司訳「複製技術時代の芸術作品」『ベンヤミン・コレクション-近代の意味』ちくま学芸文庫,1995

き出している。広場南側は比較的急な勾配の妻面を見せた屋根を載せるスラブ系の建物が建っている。北側には広場に突き出すようにヴェネチアンゴシックの特徴的な建物がある。これほどヴェネチアに忠実なデザインはアドリア海沿岸でもヴェネチア以外のイタリアにはなく、ダルマチアでのみ見られるものである。そして、広場西側には前世紀末ウィーンのゼセッション様式の館が建っている。もはや多言を要しまい。この広場には、スプリットの置かれた地理的条件と歴史的経過とが、まさに一堂に会しているのである。これほど多様でありながら、驚くべきまとまりのとれた広場は、ヨーロッパでもここにしかない。

#### ●遺跡に住む人々

スプリットの街は古代ローマの遺跡の上につくられている。これは地面の下という意味ではなく、ここでは遺跡そのものを改造し、そのなかに住んでいるのである。そして、遺跡に住むという営みも、千数百年におよぶ時間のなかで続いている。ここでは住まいがいつつくられたかという問いをかけること自体、意味をなさないような時間の堆積がある。この営みのなかで、遺跡の旧状は改変されていったが、そこに人々が生きてきたすべての時間を含み込んで、この遺跡はまぎれもなく本物である<sup>\*5</sup>。これは凍結保存ばかりが歴史的環境の維持ではないことを教えている。

先人への敬意などと意識しなくとも、材料を再利用し、空間を転用してきたことの積み重ねが歴史的環境をつくりだしてきたのである。そしてこの歴史的環境はヨーロッパ人にとっての安心につながっているに違いない。古代ローマの壁の前では子供がサッカーボールを蹴り、その壁を穿ってつくられた窓からは洗濯物がはためいている。こうした営みが続けられていることが、この街を単に自然がいっぱいなだけのリゾート地とは違った、「偉大な」魅力ある場所としているのである。